

「satya と dharma」(駒澤大学・金沢篤) レジюме

satya/sacca にしても dharma/dhamma にしても、インド思想史研究の上では最重要の役割を担う術語であると考えられる。当然ながら、これまでに多くの学者たちの様々な論攷の中で、既に縦横に論じられてきたものである。依然としてそれらの一端ですら満足に掌握し得ていない発表者ではあるが、本研究では、そうした satya と dharma の関係に特に焦点を絞った上で、再度少しく考察を加えてみたい。その論究の内実は、初期仏教思想の解明上、第一級の原典資料の一つと見なされる『スッタニパータ』Suttanipāta 中の 453、以下の一詩節に関わる先学の諸解釈を改めて参照吟味し、筆者の年来の素朴な疑念を、関連する他の若干の用例の提示と併せ、改めてささやかに表明し、その文意を確定する方途を模索したい。

saccaṃ ve amatā vācā, esa dhammo sanantano,

sacce atthe ca dhamme ca, āhu, santo paṭiṭṭhitā. (Sn, p. 79:453)=(Thag, p. 110:1229)=(S, VIII-5-9)

ここで発表者が「依然として」と言い、「再度」と言い、「改めて」と言い、「年来の」と言うのは、ここでの文献学的作業が、筆者が八年前に論文として公にした、今回と同一の題名の以下の論攷を明確に踏まえたものであるからであり、ここで用いる一次資料のほとんどすべてが、当時使用したものとほぼ同一のものであるためである。いわば今回の「satya と dharma、再考」である。

金沢篤[2002]: 「satya と dharma」『駒澤大学仏教学部論集』第 33 号 358-328 頁

発表者のこの旧稿は研究者の誰からも注目も受けることなく埋もれた形になっているが、その後、筆者は、当時参照しなかった上記用例に対する以下の 3 訳例を参照することを得た。

「“真実是不死(ネハン、甘露)のことばである”とは永遠の法である。“善い人々は真実と有意義と法とを基盤とする”とひとは言う。」(渡辺照宏[1969/1982]140 頁)

「真実是不滅の言葉であり、永遠の道理である。真実と有益さと道理とに立脚して立派な人々は言葉を語る。」(荒牧典俊他[1986]186 頁)

「真実はまさに不死の言葉であり、これは恒常の道理である。善き者たちは、真実と利益と道理とに安立したものである、という。」(宮坂宥勝[2002]118 頁)

これら 3 訳例に対して以下の重要な 2 訳例を対比させてみるならば、この Suttanipāta 453 の解釈を改めて模索することが、ヒンドゥー教/バラモン教の伝統の中から発生した仏教の satya と dharma を廻る仏教教理の展開の解明に寄与することになる筈である。

「真実は [実に] 不死のことばである。これは永遠の理法である。道義も教えも真実のうちに確立していると、立派な人々は語る。」(中村元[1982/1986]224/191 頁)

“Truth indeed is the undying word; this is eternal law. In truth, the good say, the goal and the doctrine are grounded.”(K.R.Norman[1992], p.48)